

井上達男 様

さっそく「在庫山」の雪崩に際し救助に駆けつけてくださりまして厚く御礼申し上げます。お陰様で遭難を免れることができました。

森山書店の菅田直文社長から「この方は先生とどういうご関係ですか」と尋ねられ、「いや、昔の山岳部の仲間です」「ゼミの教え子です」「同級生です」「昔からの知人です」「身内です」などと答えていますが、本当にいろいろな方面から救助に駆けつけてくださいました。有難いことだと思っております。

ところで、専門的研究書の「当世出版事情」はどうかといいますと、困難の一語に尽きるようです。大学時代、小生の恩師、市原季一先生の講義「経営学総論」(必修)のテキストは『ドイツ経営学』『ドイツ経営政策』『西独経営経済学』の3冊でした。今から思うと、いずれもきわめて高度な専門的研究書で、貧乏学生もこの3冊を買いそろえたものでした。かつてはテキストに使うからといえば、研究書の刊行も快く引き受けてもらえました。しかし、これはもう昔の話です。

昨今では「学生による授業評価」なるものが横行し、このような専門的研究書を講義用テキストに採用するものなら、学生の不評を買って評価点が急落し、そのうえ自由記述欄には「テキストにふさわしくない」「学生から金を巻き上げている」などと書かれ、挙句の果ては理事長や学長に呼び出され嚴重注意される。まったく隔世の感があります。

そこで各大学では「出版助成制度」を採り入れるようになりました。文科省にも同様の制度があります。この度も勤務先の大学から出版助成150万円を戴きましたが、それでも不足だということできらに50万円を私費で拠出しました。近年、自伝や自作の小説などを「自費出版」しないか、という宣伝がよく来るようになりましたが、200ページで200万円というのが大体の相場のようなようです。

他方、マンモス私立大学では受講者が多いので、テキストを作成してそれで出版社に儲けさせていると、研究書の出版も比較的簡単に引き受けてくれる。東京在住の友人などなんと受講生が4,000人もいて、出版社はほくほく。ところが地方の大学ではそうはいきません。多くて200名程度といったところでしょうか。

病気のこともあって、山登りは厳しいから平地を歩こうと始めたのが、山口県一周です。自宅から歩き始めて、現在、北は島根県の益田市まで、西は下関市まで踏破しました。歩くというスピードはいろいろなものを発見させ、楽しませてくれます。大体1回、3~4時間程度歩く。片道は、JRを利用したり、車を使ったりです。排気ガスの多い国道浴いは避けてできるだけ田舎道を歩いています。

宇部・小野田で瀬戸内海に流れ込んでいる「厚東川」という川があります。川浴いの道を歩いていると、昼なお暗いような竹林になってきました。見ると立て札が立っています。「痴漢に注意!」しばらく行くと今度は「変なおじさんに注意!」変なおじさん?なんだ、こりゃ、と思って前方を見ると、女子高生らしき二人組が自転車でやってくる。おいおい、オレ、変なおじさん、じゃないぞ。まったく、もう。

下関の壇ノ浦が近づくと、海浴いを歩きたいという本能からか、自ずとウォーカーが集まってきます。大きなリュックの全国行脚組、自転車組もいる。あれはひょっとするとホームレス組か。軽装でとぼとぼ歩いている小生はあるいは家出組か?

明日はクリスマス、今年も残り少なくなってきました。時間の流れの速さに驚くばかりです。ご健康とご活躍をお祈り申し上げます。乱筆ながら御礼まで。

2010年12月23日

増田正勝